

フェリペ・アンヘレス

連邦軍ジェネラル・フェリペ・アンヘレスがピヤに加わったのは特筆すべき出来事であった。アンヘレスは連邦軍高官の中で革命側に転向したただ一人のジェネラルである。双方の軍を見渡しても、彼ほどの知識人は数えるほどしかいなかった。彼は数学と砲術を教え、これ等の分野で多くの論文を残し、文学や文化に造詣が深く、読書家であった。又メキシコで彼ほど名声と人気を博した軍人は少なく、革命家の中でも数少ない理論家であった。彼は砲術、戦略、軍事組織の面で、又思想的指導者として、更に対米関係の調停者として、ピヤと彼の将兵に絶大な影響を及ぼした。

彼はポルフィリオ・ディアス時代の中産階級の出で、父はフランス軍やマキシミリアンとの戦いで功績がありディアス時代、地方政治ボスであった。1868年、フェリペはイダルゴ州サカルティパンで生まれた。小学校を終えるとパチュカの人文科学専門学校に進み、十四歳のときにメキシコでは最高の教育機関の一つである陸軍士官学校へ入学した。アンヘレスは富、パトロンや縁故に頼らず、自らの知的才能で出世した。彼は弾道学が専門で、卒業と同時に教官になった。1902年、彼はメキシコ軍の弾薬調達委員会の技術専門家としてフランスに送られた。そこで彼は調達に関する不正を発見し、委員と衝突し、本国に返されることになった。彼と対立したのはメキシコ軍の中で最も腐敗した有力ジェネラル・マヌエル・モンドゥラゴンであった。モンドゥラゴンはメキシコ軍の大砲調達係りで、大そうな金持ちになっていた。大砲のサプライヤーであるドイツのクルップに対し購入価格の二十五%を上乗せして輸出させ、差額を個人宛のコミッションとして受け取っていた。1904年、アンヘレスは別の調達案件で、技術上の観点から反対し、結局調達の仕事から追い出されることになった。一年後、彼は砲術を学ぶためフランスの二つの専門学校に派遣された。これはご褒美ではなく、ディアス政権が扱いにくい者を遠ざけたと見るほうが妥当と思われる。⁸⁶

マデロ革命が勃発した時、アンヘレスはまだフランスにいた。1910年11月、彼は革命軍と戦うことを志願したが、呼び戻されることはなかった。当時まだ政府には自信があったのと、事を大げさにしたくなかったからである。アンヘレスがマデロに抜擢されたのは、マデロと戦ったことがなく、他のディアス軍将校と違って、物議をかもし事もなかったためと思われる。⁸⁷

マデロとピノ・スワレスが逮捕された同日、アンヘレスはウエルタによって逮捕され、暫くして釈放された。その数週間後アンヘレスは、悲劇の十日間に少年の処刑を命じた、として再び逮捕された。それはメキシコ市の有力な官僚の十八歳の息子で、戦闘中アンヘレスの部隊に向かってマデロ政権転覆を呼びかけていた。アンヘレスはその少年の逮捕を命じ、部下が処刑したものであった。弁護側は、アンヘレスは処刑を命令していないこと、仮にそうであっても、戦闘中に叛乱を扇動することは反逆罪に相当し、処刑されたのは当

然であった、と抗弁した。ウエルタはビヤに対して採ったと同じ方法で裁判を長引かせ、アンヘレスを無期限に拘留しようとした。幸いアンヘレスには強力な味方がいた。マデロの処刑には異論を示さなかった米国大使ヘンリー・レーン・ウイルソンは、アンヘレスへの報復に強く反対した。もう一人は保守派の有力者で、アンヘレスの弁護を買って出たマヌエル・カレロであった。両者の圧力に屈し、ウエルタは裁判を中止して、軍事調査の名目でアンヘレスをヨーロッパに派遣した。⁸⁸

アンヘレスはパリに到着するや否や、同市在住の憲政派の代理であるミゲル・ディアス・ロムバルドに連絡を取り、憲政派のために戦うことを申し入れた。彼は家族のために、として僅か二千ドルを要求したに止まった。アンヘレスがソノラに到着したときカランサは両手を広げて歓迎し、彼を国防相に任命した。しかし、ソノラ革命軍アルバロ・オブregonに反対されたため、アンヘレスは国防相次官に格下げされ、事実上権限を全く失ってしまった。その上、考え方にも相違がはっきりとしてきた。アンヘレスは連邦軍の一部を取り込めると思っていたが、カランサは彼らを全く信用しなかった。更にカランサは反マデロ主義を鮮明にして、アンヘレスを遠ざけた。

この頃ビヤから声をかけられたアンヘレスはビヤの陣営に向かった。この時まだビヤはカランサの同盟者であったので、アンヘレスを手放したことでカランサは安堵した。アンヘレスが北部師団で果たした役割は、先ず軍事面において、ただ単に砲兵隊を組織したことだけでなく、ビヤのゲリラ軍を正規軍に仕立て上げた。次に、ビヤ軍が直面した最も重要なサカテカス作戦では、戦略と戦術を細かく練り上げた。アンヘレスはビヤの同盟者として、ソノラのホセ・マリア・マイトレナ及びエミリアノ・サパタとの連立を構築した。更に彼はビヤ派のイデオロギー宣言を起草した。⁸⁹

86. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P272

87. Ibid. P273

88. Ibid. P276

89. Ibid. P 278